

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

タイトル：「「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)」 (平成 27 年度第 4 回研究会)

日時：平成28年2月13日 (土曜日) 午後13時より19時20分

場所：AA 研405室

報告者とタイトル

13:00-15:00

湖中真哉 (静岡県立大学)

「サバンナの存在論—東アフリカ遊牧社会における避難の物質文化—」

15:10-17:10

岩谷彩子 (京都大学)

「生産的な廃棄物—インドの古着と廃品の流通から見えるもの」

17:20-19:20

長沼毅 (広島大学)

「第五種接近遭遇—宇宙人とのコミュニケーション」

研究会の概要

平成 27 年度の最後の研究会である今回は、代表者の床呂による今後の共同研究の実施方針に関する趣旨説明に引き続いて、上記のように計 3 人による報告と質疑応答が行われた。その概要は以下の通りである。

まず最初の報告者の湖中は「サバンナの存在論—東アフリカ遊牧社会における避難の物質文化」と題して報告を行った。本報告では、本研究会第 1 期拙稿(「身体と環境のインターフェイスとしての家畜」)を存在論的に発展させ、東アフリカ遊牧社会におけるものの世界を理論化することを試みた。

存在論的転回の一環として、単一の自然に対する複数の認識や表象の在り方ではなく、世界制作の方法の複数性そのものを問題化することであるならば(久保 2011)、ヨーロッパの実験室や南米の密林を対象とする議論を、そのまま東アフリカ遊牧社会に当て嵌めることはできない。ヴィヴェイロス・デ・カストロのパースペクティビズムが提起した内在性と身体性という課題を引き受けつつ、比較対象の世界制作の在り方が遠景に反転するような存在論的な比較を南米のジャングルと

東アフリカのサヴァンナの間で試みるできないだろうか。

このような問題意識に立ち、本報告では、東アフリカ遊牧社会を対象として、紛争によって発生した国内避難民の物質文化について民族誌的な報告を行った。対象とした民族集団はA、C、Dの3つであり、これらの民族集団では、近年、民族集団 B による組織的な襲撃を受けて国内避難民が発生している。半農半牧民や定住民も含まれているが、いずれも歴史的には遊牧を行ってきた。調査の方法は、家畜を全て、あるいはほとんど失って避難した世帯を対象として、その世帯が保有する全物品を悉皆調査する方法で実施した。

その結果、民族集団AとCでは、国内避難民が避難の際に持って逃げる物品に共通した傾向性が見られることが判明した。またその内容を比較検討した結果、家畜の乳容器のみが共通しており、その他の物品は民族間で異なっていることも判明した。ただし、こうした物品は、避難時に実利的に必要だという理由で選ばれているのではない。避難先で自作により再生することが可能な物品ばかりであり、そもそも家畜を失っているため、家畜の乳容器の内部にミルクはなかった。この調査結果は、各民族集団ごとに最低限のものセット(minimum set of commodities)が存在する可能性を示唆している。常に持ち歩かれる椅子や身体に沿うように身につけられる家畜の乳容器に典型的なように、遊牧民の身体は、これらのものとともに遊動するのであり、分離できないという考え方がこの背景にある。

さらに興味深いのは民族集団Dの事例である。民族集団Dが避難時に持参すべきものは皆無であるが、犬を連れて避難する。この理由は、民族集団 D にとって「犬は眼だから」である。この場合は、ものではなく犬という動物が遊牧民の身体の一部と化しているのである。この事例は、デ・カストロ(2013)の事例「アナコンダは人間と異なる眼をもつので人間には理解出来ない」や「ジャガーが人間の眼を食べる」と対照的である。遊牧社会では、人間のパースペクティブが自然のパースペクティブに吸収されるのではなく、逆に自然のパースペクティブを人間のパースペクティブが吸収するのである。

デ・カストロが描く密林空間においては、人間身体、動物、ものは空間的に不可視となり、垂直的重力による自他区分が優勢である。密林の存在論では、動物がアクタント化し、精霊がアニミズム的に跋扈し、複数の眼、パースペクティブが拮抗する。これに対して、遊動空間においては、人間の身体は、可視空間で動物およびものと一緒につねに遊動するため、水平的慣性力による自他融合が優勢である。サヴァンナの存在論では、動物やものがより極端なまでに身体化するため、パースペクティブは複数林立するのではなく、合体する(「犬は人の眼」)。これはたんなる環境決定論や認識論による比較ではない。報告者が問題にしているのは肉体としての眼の在り方そのものの比較である。

この意味において、東アフリカ遊牧民の世界制作の在り方は、「もの=人間不可分主義」ということができる。彼らの社会において、ものが身体の拡張とみなされる(過剰な身体装飾)ことも、身体がものとみなされる(身体加工)こともここから理解できる。ものや動物は、まなざしの対象でも表象でもエージェントでもないし、対称的にも対等にも扱われない。なぜなら、それは自己の一部であり、自分の手が自分と対等であるとも、生き活きとしているともいわないのと同じことである。

この意味で、ものの人類学がこれまで議論してきたエージェンシーや対称性は、すべて対象化した後の論理に過ぎない。人間とものや家畜をそもそも区別せず、それらを切れ目なく自己の一部と

して飲み込み、それらとともに形成される拡張身体として遊動してきた遊牧社会は、従来のものの人類学が指摘してきたのとは異なるサヴァンナの存在論を示している。

二番目の岩谷による報告は、「生産的な廃棄物—インドの古着と廃品の流通から見えてくるもの」と題して以下のような報告が実施された。

インドにおいて、従来衣服は儀礼的な意味と役割をもつ象徴財である。しかし1990年代の市場開放以降、大量消費・生産の波に乗り、着用する衣服は多様化し古着の量は増大している。またこれまでは特定のカーストの成員が処理していた生活ゴミに加えて、スクラップや古紙、古物など新たな再利用価値のある廃棄物 (*bhanga*) が生まれている。このような変動する社会の隙間に生まれた余剰物を北西インド、グジャラート州アフマダーバードで流通させ、新たな市場を生み出しているのが、かつて狩猟採集も行ってた商業移動民デヴィ・プージャック (Devi Pūjak。改名前はヴァグリ Vaghri) の人びとである。本報告では、彼らが収集・加工し、商品として再び市場に流通させている古着とスクラップ (古物) の経路をたどった。そこでいったん (中・上位カーストから) 廃棄された「もの」は、デヴィ・プージャックを中心とする人びとに媒介され、一時的に路上や市場などの公共空間で分類され売買されつつ、一つの場所に集積することなく異なる人びとの手に渡り、地域や国境を超えた「もの」のフローとネットワークを作りだしていた。

本報告の事例が問題にするのは、廃棄される「もの」がもつ創造性である。本事例で紹介した「廃棄物」は、「日常生活のなかで排出され、廃棄される不要物」としての *waste* ではない。本事例で取り上げた古着もスクラップも、コピトフ [Kopytoff 1986] が指摘したように、「商品文脈」のなかで「商品局面」に入ることもあれば出ることあり「文化的な履歴」によってはきわめて大きな価値を帯びる「もの」である。本事例が有する「商品文脈」を左右するのは、インドの不浄をめぐる価値観 [Dumont 1970] や「廃棄物」をめぐる国際的な市場である。インドでは、人のサブスタンス (身体を構成するもの) は、やりとりされる「もの」を通して決定されるとされ [Marriott 1976]、「もの」の授受によって人は社会に位置づけられる。本事例の「古着」やスクラップゴミも、中・上位カーストにとっては、けがれが付着した無用なものでしかないが、それらは収集され再分配される過程で形を変え、元の「もの」にはなかった意味や価値 (「アンティーク」「エスニック・シック」「エコロジー」「レアメタル」) が加えられて再び流通する。ただその一方で、それらの分配に従事する低位カーストには、相変わらず「けがれ」イメージや、仕事をする際の健康への影響も指摘できる。交換される過程で変形した「もの」が、どこまで人のサブスタンスやネットワークの変化となっているのか、また「もの」の変形のあり方についての歴史変化や変形の限界については、今後さらなる検討が必要である。

三番目の報告者の長沼による発表の概要は下記の通りである。

2015年12月、ドイツのキール大学で開催された日独学術コロキウムに参加した。そのテーマは「アストロバイオロジー」(宇宙生物学) だった。こんなのは20世紀なら“キワモノ”と揶揄されたが、21世紀に入ってから急に“最先端”扱いされはじめてきた。天文学、感

星科学、生物学などの専門家が集まって「地球外生命」を大マジメに議論したのだ。

アメリカ航空宇宙局 (NASA) には「NASA アストロバイオロジー研究所」略称 NAI があって、この分野をリードしている。日本でもついに昨年、日本のサイエンス界を代表する「自然科学研究機構」の中に「アストロバイオロジーセンター」略称 ABC が新設された。これが実現したのは、機構長の佐藤勝彦先生の御蔭である。佐藤先生は宇宙の成り立ち（起源、歴史、構造など）を説明する「インフレーション宇宙論」を唱えたことで有名な物理学者である。

こういう風潮の背景には「はやぶさ」などの宇宙探査技術の進歩や、地球の深海や南極などに住む“極限生物”の発見などがあつたが、ここで特に言及したいのは「系外惑星」の発見である。それは文字通り「太陽系にある以外の惑星」である。夜空に見える星々のほとんどは“われわれの太陽”と同じ恒星で、やはり惑星をもっている。この中には「水が沸騰しないし、凍りつかない」と気温がちょうどよい惑星、いわゆる「生命存在可能惑星」があつて、この銀河系だけで四百億個と推定する研究者もいるのだ。これだけあれば、そのどこかに知的生命体、つまり“宇宙人”がいてもよさそうではないか。

人間が電波でコミュニケーションするようになって約 100 年。この間、ラジオやテレビの電波は宇宙にダダ漏れ状態、地球を中心にして半径百光年の内側にはラジオやテレビの電波が届いている。高度な文明を築いた宇宙人ならそれを傍受して「地球人ってのはアレだね」と呆れているかもしれない。

そもそも、われわれ地球人が系外惑星を発見したのは望遠鏡によってである。ならば、宇宙人もすでに地球を見ているかもしれない。そして、すでにメッセージを発信し、明日にでもその電波が地球に届くのではないか。それを受信しようという「地球外知的生命探査」略称 SETI (Search for Extraterrestrial Intelligence) という活動がある。世界各地の電波望遠鏡を受信機にして、宇宙からの電波信号に耳を澄ますのだ。

1977 年 8 月、不自然なシグナルが捕らえられた。驚いた観測手は記録用紙に「Wow!」と記したので「Wow! シグナル」と呼ばれている。このわずか三ヶ月後、アメリカ映画「未知との遭遇」(原題 Close Encounters of the Third Kind、第三週接近遭遇) が公開された。UFO で飛来した宇宙人と地球人との出会いを描いた映画である。この映画の終わり近くで米国の天文学者アレン・ハイネック博士が出演している。ハイネック博士はまさに“第三週接近遭遇”など、UFO との遭遇をランク付けた UFO 研究者でもある。ちなみに“第三種接近遭遇”は「UFO に動くもの(生命体、ロボット)が乗っている」レベルを指すが、この映画の内容ならむしろ本稿の題名“第五種接近遭遇”「人間と宇宙人の直接的コミュニケーション」のほうが相応しいと思われる。

実際の系外惑星は UFO でやって来るには遠すぎるが、単にコミュニケーションだけなら、乗り物の代わりに電波が使える。コンピューターのソフトウェアや“ウイルス”でさえも電波で送れるほどだ、電波でも十分だろう。Wow! シグナルからもう 39 年、「未知との遭遇」がそろそろ現実になりそうな予感がしてならない。

また以上の三つの報告に対しては、参加者全員による質疑応答が実施された。とりわけ湖中と岩谷の報告に関しては、それぞれ従来の「もの」をめぐる人類学的研究の理論的潮流との共通性と差異をめぐる活発な討論が行われた。また長沼による報告に関しては、そもそも「知的 *intelligent*」であることの定義はどこに求められるのか、などの点をはじめ事実関係も含めて質疑応答が行われた。また研究会の最後には、代表者の床呂より次年度以降の研究会の実施予定などに関してアナウンスがあった。

以上。